

菅谷富夫

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 学芸員

モノを生産し流通させることで成立した街・大阪は、そのための宣伝活動も自ずと活発であった。工業生産高や貿易高がひとつのピークをむかえた「大大阪」の時代、それは同時に宣伝の時代、デザインの時代でもあった。多様な産業は多くのユニークなデザイナーを生み、彼等の活動は商品の宣伝として経済に寄与したばかりでなく、優れた街の中の芸術としてモダン都市大阪を彩ったのであった。やがてその活動は日本全体のデザインをもリードしていった。

華開く グラフィック デザインの世界



引札 [紋彦] 明治期

明治から大正期にかけて、大阪の商店は宣伝広告媒体として豪華な宣伝ビラである「引札」を配布した。制作は印刷業者が引き受け、デザインも印刷業者内の画工が担当することが多かった。近代的デザインの職制確立以前の活動と、当時の印刷水準の高さをうかがい知ることができる。

大阪市立中央図書館 蔵

大阪は商業都市、工業都市として発展してきた。その歴史は江戸時代より始まっているが、二〇世紀になりその形態は急速に近代化していった。官による砲兵工廠や大阪港から広がる繊維工場群や鉄工所群。船場の織維問屋に代表される各種卸問屋街。モノづくりとそれを扱う販売網を発達させた都市には、「デザイン」という機能が活躍する場が溢れていたと考えられる。よきモノ、売れるモノをつくるためにはプロダクツ・デザインが、それを消費者に売り込むための宣伝媒体にはグラフィック・デザインが発達したのはいうまでもない。

二〇世紀初め、大阪の近代化は大大阪の成立は、このグラフィック・デザインの近代化にも大きく影響を及ぼした。直接にはその担い手であるデザイナーの養成に市が乗り出したことである。新たな開発地域であった阿倍野・文の里に設立された大阪市立工芸学校である。

この旧制中学に相当する「専門」学校には木工科、金工科と並んで図案科が設置され、それまで印刷業者が抱える画工たちが担っていたデザインという職能を代わりに担う近代的な意味でのデザイナー(当時はコピーライター/文案家に対して図案家と呼ばれた)が養成されていった。この学校からは、当時はもちろん、戦後

早川良雄 (1917~)
 [近鉄百貨店 第七回秋の秀彩会]
 昭和26年 (1951)

大阪市立工芸学校卒業後、百貨店の宣伝部に勤務するも兵役によって本格的なデザイナーデビューが遅れた早川が、本格的に活躍するのは戦後になってからであったが、1950年代以降、日本のデザイン界をリードする代表的なデザイナーのひとりとなった。簡潔で大胆なイラストレーションと親しみやすくモダンな感じのレタリングが印象的なこの作品は、早川初期の代表作である。



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵



大阪市立工芸学校
 第二次大戦前・後を通して大阪のデザイナー・画家を多く輩出し、大阪のデザイン文化に多大な貢献をした。現在も大阪市立工芸高校の校舎として使われているこの建築は、開校の翌年(1924年)、ドイツの総合デザイン・建築学校であるバウハウスの初代校舎(在ワイマール)を意識して建設された。

一失われた都市の記憶を求めて一

美術都市 大阪 発見 第四回



早川源一 (1906-1976)
[阪神電車]
昭和13年 (1938)

都市化とともに郊外に延びる私鉄路線は住宅地と並び観光地開発にも力を注ぎ、そのための宣伝活動を活発に行った。そのため鉄道関連の宣伝物はデザイナーたちの主要な活躍の場のひとつとなった。この作品からは、当時のデザイナーの力量がいかに絵画的技量に基づいていたかを知ることができる。

[ゲリゾン]
昭和13年
(1938)

製薬業は江戸時代以来、大阪を代表する産業のひとつである。製薬業が近代化し医師向けの医薬品と大衆向けの医薬品に大きく分かれた後も、宣伝広告は営業戦略上重要なものとして発展した。この「ゲリゾン」も簡潔に科学的イメージと商品名を印象付けることに成功している。



[ショップガイド
創刊号]
昭和13年 (1938)

大阪は観光・買い物の街でもあり、そのためのガイドブックも数種類あったらしい。心齋橋をはじめとするモダンな商店街を中心に、消費に基づいた新しい都市文化の形成に貢献した。それを飾るグラフィックも当然、消費者の好みを先取りするモダンなものであった。